



レズビアン人肉食小説
「鬼女」

大黒達也

レズビアン人肉食小説『鬼女』

作者 大黒達也

「鬼女」

一・あらすじ

人目を惹きつける美貌を持ち、女の細腕で大型トラックを自在に操る謎の美女加納 理沙。理沙には、暗い秘密があつた。若く美しい女を浚い、したい放題に陵辱した後、最後には……。

二・登場人物

加納 理沙（カノウ リサ）

人目を惹きつけるほどの美貌を持ち、大型トラックを自在に操る謎の美女

森 彩（モリ アヤ）

モデルのような美貌と、美しい肢体を持った女。北海道をバイクで旅行中に理沙によって囚われの身となる

早瀬 恵（ハヤセ メグミ）

H大の二年生。美貌と美しい肢体を持った女。どちらかというと、控えめで、大人しい性格。北海道を車で、友人の亜里沙と旅行中に理沙に囚われる。

香月 亜里沙（カツキ アリサ）

恵の同級生。恵に劣らない容姿を持った美女。性格は

はつきりとしていて多少きついところがある。

加川 真由美（カガワ マユミ）

ペンション白樺の経営者。交通事故で最愛の夫と娘を失い、生きる希望を失ったその時、理沙に囚われ陵辱の限りを受ける。

三・ 目次

第一章 女食らい

第二章 女子大生

第三章 未亡人

四・本編

第一章 女食らい

根釧原野の大地には、行き着く先を見失うほどに茫漠とした自然が、広がっていた。一台の大型トラックが、どこまでも続く農道を、爆走していた。車種は、ダイムラークライスラー社製アストロカーゴニ五三五。全長一万一千九百八十ミリメートル、全幅二千四百九十ミリメートル、全高三千九十五ミリメートル、排気量一万一千九百四十六ccインタークーラーターボ、出力三百五十四馬力。実に公道を走る怪物であった。

運転しているのは、まだ二十歳中頃の美しい女だ。サングラスをかけ、白いTシャツに薄皮製のパンツを履いていた。

前方の路肩に一台のバイクが止っていた。近くで人影が動いていた。近づくに連れて人影は、パンク修理中の年若い女であることがわかった。トラックはバイクの手前十メートルのところで停車した。ドアが開き、先ほどの女が降りて、パンク修理を行っている女に近付いた。

「どうしたの？パンク？」

女は、黒革製の革ジャンパーに皮ズボンを履き、地面に座りチューブの点検を行っていた。

近くの芝生の上に皮ジャンパーが脱ぎ捨てられていた。Tシャツの胸の部分が、弾けそうになるほど隆起していた。容貌も申し分無く、切れ長の二重瞼が美しかった。

「そうなのよ。参ったわ。こんな山奥で」

女は、顔を上げて驚いたように、声をかけて来た女の

顔を見詰めた。年の頃は同じくらいであろうか。モデルを思わせるような美しい顔立ちをしていた。大型トラックを操るようには見えなかった。

「ねえ。乗って行かない。もうすぐ日が暮れるわよ。バイクは荷台に積めるし。近くの町まで送ってあげるわよ」
女は、暮れかかる西の空を見上げるように言った。

「ありがとう。だけど、そうね……。やっぱりやめておくれ。時間はたっぷりあるし、何だったらここで野宿してもいいし」

「そうお。じゃあ行くね。この辺、熊が出るそうだから気を付けてね」

女は豊かな尻を振りながら、トラックに向けて歩き出した。腰の位置が驚くほどに高い。

残された女は、チューブの点検を再開した。夕暮れ時なので気温が下がっていた。防寒のために革ジャンパーを着ることにした。暫くの間、チューブのパンク箇所を捜していた。

やっとのことで小さな穴を見つけることができた。修理道具に手を伸ばそうとした時、背後に鋭い殺気を感じた。

恐る恐る振り向いた。先ほどの女が立って、見下ろしていた。右手には銃身を短く切りつめたショットガンを握っていた。

「……どうしたの？」

「立ちな。言うこと聞かないとぶち殺すよ」

「何で？何か気に入らないこと言ったかしら」

耳を劈くような轟音がした。空に向けられた銃口から白煙が立ち上った。女の肩ががたと震え出した。

「二度は言わないよ」

「……」

女は言われた通りに、立ち上がった。銃を持った女が、背後に回り銃口を背中に押し付けてきた。

「何か気に入らないことを言ったかって聞いてたよね。

そんなことは無いさ。ただ、あんたが最高にかした女だからいけないんだ。私ね。バイなの。バイセクシヤル。

わかるかな？両刀使いってやつ。あんたみたいな女が好みなんだ。背が高く、グラマーで、顔も申し分ないしね。

あんたノンケだろう？どうせ男にしか興味が無いんだよ

ね」

女は話しながら、背後から皮ズボンのベルトに手をかけた。ベルトを外し、ズボンを引き下げようとした。

「止めて。何するの！」

「あんたのケツを拝みたいだけさ。大人しくしないと本当に殺すよ。殺した後だって楽しめるんだからね」

静かになった女のズボンを降ろした。目の前に、ピンク色のパンティに包まれた美尻が露になった。

んたは？」

「そう言えば名前を聞いていなかったね。私は理沙。あ



「彩」

下を向いて、ぼそりと飲み込むように言った。理沙と名乗った女が、パンティに手をかけゆつくりと引き摺り下ろした。目の前に泣きたくなるほど美しい尻が剥き出しになった。深い尻の割れ目に顔を近付けた。

「きれいなオシリだね。それにいい香いがする。香水でも付けているのかい？ どうだい？ 女に犯られる気分は？」

「もう許して。お願い！」

彩は涙声で懇願した。

「まだ、始まったばかりじゃないか」

理沙は、彩の尻に顔を押し付け、アヌスを舌先でこじ

開けながら、乾いた膣に指先をずぶりと挿入した。

「うっ。い、痛い。許して！」

彩はアヌスに生暖かい舌を入れられ、嫌悪感のため気がおかしくなりかけていた。

これまでに同性とSEXの経験は、皆無であった。

「美味しいね。若い女のケツは」

理沙は立ち上がり、周囲を見渡した。

「後でたっぷり可愛がってあげるね」

下半身を剥き出しにして、咽び泣く彩の後ろ手を掴み、引き摺る様にしてトラックに向かった。荷台の後部扉を開け、彩の身体を軽々と持ち上げた。

荷台の内部は、前側半分のスペースが居住区となっていた。長さ五メートル幅二・五メートルほどの広さに、バス・トイレ、キッチンそしてダブルベッドを設置した

寝室が、コンパクトにまとめられていた。後ろ側の半分は、人ひとりが入れそうな巨大なオーブンや、ガスコンロが置かれたキッチンスペースとなっていた。オーブンの横に面して、巨大な冷蔵庫が置かれ、その横には人ひとりを丸洗いにできそうな巨大なシンクが配置されていた。中央には、長さニメートル幅一メートルほどのテーブルが置かれていた。テーブルの上は、まな板となっており、周囲には溝が切られていた。

理沙は、寝室へと続くドアを開け、彩をバス・トイレの中に閉じ込め、外から鍵をかけた。

「大人しくしているんだよ」

一言いって車外に出た。路上に置き捨てられていた彩の皮ズボンを布製の袋に、押し込んだ。近くに落ちてい

た。ピンク色のパンティを拾い上げ、鼻に押し付け匂いを嗅いだ。香水の臭いに混じり、若い女のエキスの香いを感じた。若い女のしかも使用済みのパンティは闇で高く売れた。皮手袋をはき、バイクの荷台に積んであったバッグを開けた。中には、化粧品やサイフ等の日曜雑貨が詰まっていた。サイフから数万円あまりの現金とキャッシュカードを抜き取った。

後始末を終え、荷台内部の部屋に戻った。思ったとおり、彩はバスルームの中で大きな音を立て、暴れていた。扉に体当たりをしていた。獲物を閉じ込めるための場所でもあるバスルームの扉は頑丈にできていた。非力な女の方で何とかなる代物ではなかった。

「静かにしてろといっただろう！」

理沙が声を荒げた。バスルームの物音がピタリと止んだ。乱暴に扉を開け放ち、床に蹲り、震えている彩を抱き起こし、腹部に拳を見舞った。一発で意識を失い、床に横たわった。革ジャンパーをはぎ取り、Tシャツを引き裂き、ブラジャーを引き千切った。豊かな乳房が零れ落ちた。

「堪らないね」

独り言を呟き、乳房を舐めまわした。理沙は着ていた衣服をすべて脱ぎ去り全裸となった。

彩の両手を背後に回し手錠で拘束した。彩の膺にシェビングクリームを塗りたくり、安全カミソリで陰毛をきれいに剃り落とした。サーモンピンク色の膺が露になった。シャワーの湯で洗い落とし、今度は両手にボディソ

ーブを付け、彩の股間を重点的に洗い始めた。

そのうちに彩が目を覚ました。ぼんやりとした表情で、理沙の顔を見詰めていた。やがて焦点が合った。

「お願い。もう許して！」

「まだわからないのかい。お前はもう人間じゃないんだ。ただの家畜さ。飼い主はこの私だよ。さあ。ぼさっとしないでこっちに、お前の美味そうなケツを向けるんだ

よ

後ろ手を拘束されているので、肩を床に付いて四つん這いになり、染み一つ無い美尻を向けた。理沙はアヌスと膣に指先を差込み、ゆっくりと抜き差し始めた。

「たっぷりと、女の味を教えてあげるからね」

彩は次第に同性による鬨りに感じ始めていた。的を射

た指先の動きは絶妙だった。

「彼氏はいるのかい？」

彩は無言で頷いた。

「へえ。お前のこの身体じゃ。男は狂うだろうね。前戯はたっぷりとここを舐めてもらうんだろうね」

理沙は、綾の腰を押さえ込み、盛り上がった尻の合間を舐め上げた。

「ああ……」

彩は小さな喘ぎ声をあげた。盛り上がった白い尻が妖しく動き始めた。

「感じてきたのかい？いいんだよ。逝っても。遠慮することはないよ。そらま*こ汁が出て来た……」

尻の合間に顔を押し付け、亀裂から滴り落ちる愛液を、

舌先ですくうようにして舐めた。それから彩を仰向けにして、太腿を押し広げ股間に顔を押し付け、ジュルジュルと音を立てて、貪るように舐め始めた。自分の臍に指先を入れ掻き回した。

「お・お……。いい……」

それから、彩は一時間ほど、バスルームで理沙に犯された。理沙の巧みな愛撫によって何度も絶頂に導かれた。最後は、小水を进らせながら、鋭い喘ぎ声を上げ背筋を仰け反らせるようにして失神した。

理沙は、失神した彩の裸身をシャワーで洗い清めた。身長百七十センチ近い彩を軽々と抱き上げてバスルームを出た。部屋の片隅に毛布が敷かれた一角があった。理沙は、彩を毛布の上に横たえた。その近くに、様式のウ

オシユレットがついた便座が置かれていた。トイレは他にバスルームにも付いていた。さらに、近くの床から、首輪の付いた長さ二メートルほどの鎖が、伸びていた。理沙は彩にその首輪をはめた。彩の近くに椅子を移動させ、赤のグラスワインを飲みながら、若さに溢れた瑞々しい裸体を鑑賞した。

一時間後、彩が失神から覚めた。ぼんやりとした表情で周囲を見渡した。鎖の付いた首輪をはめられていることに、気が付いた。

「お目覚めかい？可愛い子豚ちゃん」
「どうして。なぜ、こんなことを……」

彩は、涙目で、理沙を見詰めた。

「何度も言わせないでくれよ。お前は私に狩られたん

だ。獲物なんだよ。その美味そうなおっぱいも、ケツも私の物なんだ」

理沙は前屈みになり、床に座っている彩の乳房を掴みあげた。

「ぎっしりお肉が詰まっているね。涎が出てきたよ」

「お願いします。どうか許して下さい」

「物分かりが悪い女だね。まったく」

理沙は、左手に持っていた棒状の物を、彩の乳首に押し付けた。

バシツという音がして、彩が「うっ……」という呻き声をあげ、床に転がった。

「こいつは、スタンガンさ。名前くらい聞いたことがあるだろう？三十万ボルトの電撃をおま*こに、やろうか

い？」

理沙は仰向けに横たわる彩の太腿を押し広げ、スタンガンを膣口にズブリと差し込んだ。

「止めて！お願い。何でも聞きますから」

「そうかい何でも聞くんだね。二度は言わないからね。

じゃあ、まずウンチをしてもらおうかね。これからウンチの時間もアタイが決めるからね。黙ってないでさつさと四つん這いになるんだよ！」

彩は、よろよると四つん這いになり、豊かな白い尻を突き出した。理沙は近くのテーブルに置かれた医療ボックスから、極太の浣腸器を取り出した。中にはひまし油が詰まっていた。彩の背後に、膝立ちになり、両手で尻を割って顔を押し付けた。舌先でアヌスが緩むまで舐っ

た。頃合いを見て、浣腸器を可憐な蕾に突き刺した。一
気に中身を挿入した。

「いやー！」

彩は声を限りに泣き叫んだ。同性にシタイ放題に犯され、今度はアヌスを剥き出しにされ、浣腸までされているのだ。恋人にも見せたことのない、恥ずかしい姿態であった。すぐに堪えられないほどの便意を感じた。

「トイレに行かせて！」

「近くにあるだろう。そこでするんだね」

理沙は、近くの便座をスタンガンで指し示し、冷たく言い放った。彩はよろよろと立ち上がり、便座に座った。

理沙は、彩の前に屈み込んだ。

「もっと足を開くんだよ」

スタンガンの先端で太腿をこづいた。彩はオズオズと太腿を開いた。

「お前のように美しい女がどんな糞を垂れるか、見物だよ」

理沙は、彩の重たげな乳房を、揉みしだいた。

「ああ……。もう駄目、出ちゃう！」

ブリブリという排泄音がして異臭が立ち込めた。

「臭いね。鼻が曲りそうだよ」

理沙は便座についているウォシュレットのスイッチを押した。洗浄の後に、茫然自失の彩を立たせ、鼻歌を歌いながら、アヌスに付着した水滴をトイレットペーパーで拭き取った。尻の割れ目に、鼻先を、押し込み匂いを嗅いだ。

「合格だね」

彩の首輪に付いた鎖を引き、毛布を敷いた床に、仰向けに横たえた。瞳には光が無く、ぼんやりと虚空を漂っていた。理沙は彩の唇に食らいつき舌を吸い出した。思う存分に柔らかな舌をしゃぶった。舌の味に満足すると、首筋に舌を這わせ、乳首を口に含んだ。彩の目元から一滴の涙が零れ落ちた。女の理沙から見ても美しい乳房だった。手の平で揉みしだきながら、存分に舐めまわした。

乳房の次に、股間に顔を入れた。若い女の素晴らしい香いが、鼻腔をくすぐった。陰毛を剃られた膣が、愛液を滴らせ、淫らに蠢いていた。

理沙は、己が膣を弄りながら、彩の膣をあま噛みし、しゃぶり、舐めた。舌先を可能な限り膣口に挿入した。

愛液が滴る膣壁を舌で抉った。小さめなクリトリスを口に含み、舌先さきで転がした。

「ああ……。いい……。駄目。逝っちゃう！」

「あたいもだよ！お前のおま*こ食らってやる！」

「食べて！彩。逝っちゃう！」

余りの快感に恐怖さえも忘れた。自分を監禁し凌辱している女に恐怖の念を抱いていたが。命まで取られるとは考えていなかった。同性の凄まじいテクニクに我を忘れた。少なくとも妊娠の心配は無かった。

荒波のような快感が全身を走り抜けた。理沙が彩のアヌスに人差し指を根本まで差し込んだ。

「いや！逝く！」

彩は理沙の頭を、太腿で締め上げ、背筋を仰け反らせ

絶頂に達した。二人は、暫くの間、床に横たわり余韻に浸っていた。

理沙は、日に何度も、バスを使った。その度に、彩の全身を洗い清めた。シャワーとボディソープで洗った後に、彩を四つん這いの姿勢にし、樽生ビールを全身に、注ぎかけ念入りにブラッシングした。食事も三度、与えられた。すべて果物とビールだった。理沙が、血の滴るようなステーキ肉を、美味しそうに頬張る様子を、横目で見ながら、オレンジやリンゴを食べていた。

それから一週間あまり、彩の監禁生活は続いた。監獄となったトラックは、停車したままであり、どこかに駐車しているようだった。食べて、風呂に入る以外は、す

べて理沙によって騷られていた。排泄の際も、理沙の目
前で行わねばならなかった。

理沙は嬉嬉とした表情を浮かべ、ウオシユレットをし
た後にトイレットペーパーで、彩の盛り上がった白い尻や
臍を拭いて楽しんだ。

彩は次第に理沙により、肉体のみでなく精神も支配さ
れるようになった。命じられなくとも理沙に美尻を向け
るようになった。臍やアヌスを舐めながら、理沙の顔
に股間を擦り付けた。凶太い張形で臍を貫かれ、舌を吸
われながら絶頂に達した。

終日、四つん這いにされ臍やアヌスを舐められることも
あった。逝っても逝っても解放されることはなかった。

終いには「入れて！」と泣き叫んだ。

バスルームでは、床に横たわる理沙の顔に跨り、放尿するように命じられた。アヌスを指でかき回され、膣を激しい勢いで舐られながら理沙の口に放尿した。

彩は、連日にわたる激しい陵辱のために、気がおかしくなりかけていた。理沙に犯されても反応しないことがあった。理沙は、人形のように呆然と虚空を見詰める彩に、様々な陵辱を加えた。

八日目の朝、彩は理沙によって、これまでにないほど大量の浣腸を行われた。

バスルームで、全身を念入りに洗われた後、車両後部のキッチンに連れて行かれた。

人ひとり入れる位の巨大なシンクに入れられ、今度は、

食器用洗剤で全身を、洗われた。その後で、シンクに隣り合った調理台に載せられた。身長百七十センチの裸身が目の前に股を広げた状態で横たわっていた。寝ても崩れない豊かな乳房、陰毛を剃られた臍が剥き出しになっていた。極上の柔肉であった。

「食べ頃だね。どんな風に食べて欲しい？」

彩は、理沙の言っている意味が分からなかった。

「この美味そうな尻肉と腿肉は、ステーキにして、おっぱいはシチューにしようかな。考えるだけで生涎が出て来たよ」

ぼんやりとした表情の彩を後ろ手に手錠で拘束した。

片方の手で彩の黒髪を鷲掴みにし、空いている方の手を臍に当て、押さえつけるようにした。指先を根元まで臍

に差し込んだ。

「ああ……」

彩が鋭い喘ぎ声をあげた。

「最初に血抜きをしないとね」

彩の口蓋を舌でこじ開け、舌を吸出し、音を立てて吸った。暫く楽しんだ後に舌を開放し、顎から首筋にかけて、ゆっくりと舌先を這わせた。

理沙の瞳が潤み始めた。可愛い口を開け、首筋に歯を当てた。徐々に顎に力を入れていった。彩がもがき始めた。

「痛い。止めて。許して！」

彩の哀願も虚しく、理沙が、一気に首筋を噛み切った。

頸動脈が切断され、鮮血が噴水のように噴出した。口を

付け喉に流し込んだ。

「ギャー！」

彩は瑞々しい裸身を震わせ、失禁した。膣が理沙の指先を強く締め上げた。

流れ出す血の勢いが弱まった。理沙は音を立てて吸い始めた。強く吸うたびに彩の裸身がピクリと跳ねた。やがて、指先を締め上げていた力が弱まり、痙攣も収まった。彩は両目を見開き、絶命していた。理沙は、顔にべつたりと付いた鮮血をタオルで拭き取った。

白い尻を食い入るように見詰めた。そこには女のすべて

彩をうつ伏せにした。沁みひとつなくて盛り上がった



が凝縮されていた。片側の尻の膨らみに噛み付き、一気に噛み裂いた。人間の顎力では不可能な技であった。脂肪層を食い破り、赤みの柔肉を食いちぎった。オオトロの甘味に似た食感が口内に広がった。

咀嚼しては、飲み込み、噛み裂き、咀嚼した。いくらでも食べることができた。

尻の片側をあらかた平らげた後、刺身包丁で解体を始めた。残った尻肉を削ぎ落とし、仰向けにしてから、臆肉を削り取った。解体をしながら味見をした。

切り取った柔肉は、ステーキ大に切り分けた。重たげな乳房を切り取り、胸元から下腹部まで縦に切り裂いた。湯気をあげる腸や肝臓や心臓を掴み出した。肝臓の一部を切り取り口に入れた。新鮮なレバサシは甘くとろける

ようだった。

両足は、鋸で切断した。最高の生ハムができる筈だ。

両手も鋸で根元から切断し、さらに肘の部分で両断した。

水が満たされた大鍋に入れ、火をつけた。夕食に中華ス

ープを加えることにした。

完

第三章
未亡人

第二章
女子大生